



ブック

高橋氏は「持つて生まれた才能はいつか必ず花開く」として、親がすべきことは、その才能が花開くのを温かく見守ることだという。子どもを幸せに導くためには、共感力、意思決定力、自己肯定感の3つを育てよ、という。子どもへの愛の伝え方については、たとえば子どもがお母さんにかまってほしくて「おなか痛い」などと訴えたりすることを注意喚起行動としてとらえ、「つらい思いをさせてごめんね」と感じるだけで、子どもには十分に愛情が伝わるという。また、学校については、「小学1年生は家庭からの脱皮の時期。先生を尊敬し、信頼して任せてください」と訴える。

小児科医のぼくが伝えたい 最高の子育て



高橋孝雄 著

1404円 マガジンハウス
☎03-3545-7030

やすいはずがない。見も知らぬ子どもに「いてくれてありがとう」と感謝し、共感できることが、文化度の高さだという。そして、子どもをもたない人でも社会の中で子育てに参加したらどうかと呼びかける。

評者は考える。学校教育の立場から、今の親のわがままを批判したり、絶望したりするだけでは、解決にはならない。自己肯定感を持ってない親、人生の大切なワンシーンである子育ての時期に、抑うつ状態にさえ陥る親の悩みにさえ陥る親の悩みに受け止め、「親は子どもの才能が花開くのを温かく見守るだけでよい」というメッセージを伝えることこそ、重要ではないか。さらには、個人完結型の子育てで親を追いつめるのではなく、社会的な育児参加を進め、誰もが「子ども時代の宝物」を大切にする豊かな文化をもつ社会にすることこそ最も本質的な解決への道だと考える。

(前聖徳大学教授・西村美東士)